

文禄の役(壬辰の乱)における日本、朝鮮、明医学の交わり

日本医史学雑誌第五十二巻第二号 平成十八年一月十一日受付
平成十八年 六月二十日発行 平成十八年五月十四日受理

松岡尚則¹⁾・山下幸一²⁾・村崎徹³⁾

1) 高知大学医学部腫瘍局所制御学

2) 高知大学医学部麻酔・救急・災害医学

3) 神戸大学大学院医学系研究科環境応答医学講座環境医学分野

〔要旨〕 韓医学は、豊臣秀吉の戦争を契機に最大の影響を日本に与えた。その中心は多量な李朝版医書と出版技術の伝来であったが、人材も渡来したとされる。長宗我部家も朝鮮半島に出兵し、複数の医師を連れ帰っている。この中に、金徳邦という医師がいたとされる。金徳邦は明人雲海に学んだ。文禄二年に土佐に連れてこられ、来日後一年間は、治療効果を見せず、薬害を起こしている。それを恥じて、朝鮮の風土とは違う日本向きの薬法に改め、以来治療効果を上げて信望を高めた。金徳邦の医術(雲海士流)は、金徳邦の死後、長生庵了味(桑名将監)・桑名玄徳、粉川家(粉川春與)、村上家(村上溪南)に伝承されたことが明らかになった。

キーワード——雲海士流、文禄の役、韓医学、金徳、経東、金徳邦

緒言

一五九二〜九八年間の二度にわたる文祿・慶長の役において、日本に大量の韓籍や韓版漢籍、人材が伝来したとされる¹⁾。長宗我部家も朝鮮半島に出兵し、医師を連れ帰っている。この中に、金徳という医師がいたとされる。金徳の医学の系譜、その内容はいかなるものであつたのか不明とされる。今回、これに対して調査を行った。

方法

高知市民図書館、高知県立図書館、武田科学振興財団杏雨書屋、京都大学図書館、エーザイ内藤記念くすり博物館、高知大学図書館、森ノ宮学園はりきゅうミュージアム、お茶の水図書館（茶図成實）、ソウル大 学奎章閣の資料を利用し、調査した。

結果

金徳に関わる関連書一覧を表1に示す。これらの中で、金徳は朝鮮国の医官とされ、経東、金徳、金徳邦、金徳許、金徳許徳原、金得拜、金得許とも書かれていた。『鍼灸極秘伝』（図1）の自序には金徳邦→長田徳本→田中知新→原恭庵→木邨元貞

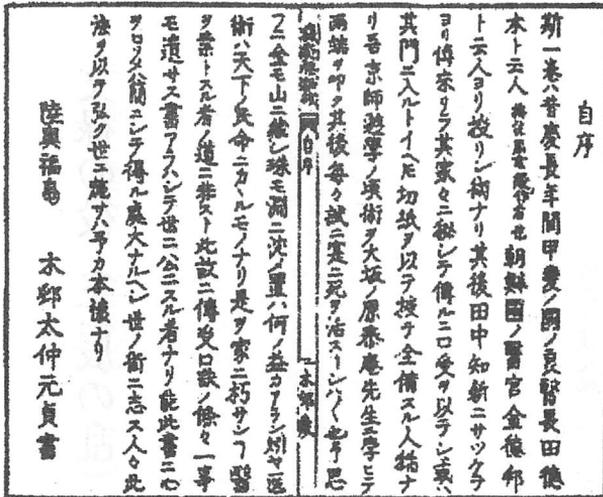


図1 『鍼灸極秘伝』の自序

金徳邦→長田徳本→田中知新→原恭庵→木邨元貞の系譜がみられた。『鍼灸極秘伝一巻』には慶長年間甲斐の国の良医長田徳本が朝鮮国の医官 金徳邦に授かった術であると記載されている。

貞の系譜がみられた。『鍼要集』(図2)には雲海士↓金徳↓桑名玄徳の系譜がみられた。⁽²⁾ 明人の雲海は師を尋ねて四方を遊歴し、遂に補瀉の法、死生の訣を得、のち朝鮮の金徳がこれに師事し、悉くその伝を淑することを得ることができたとされる。文禄の役

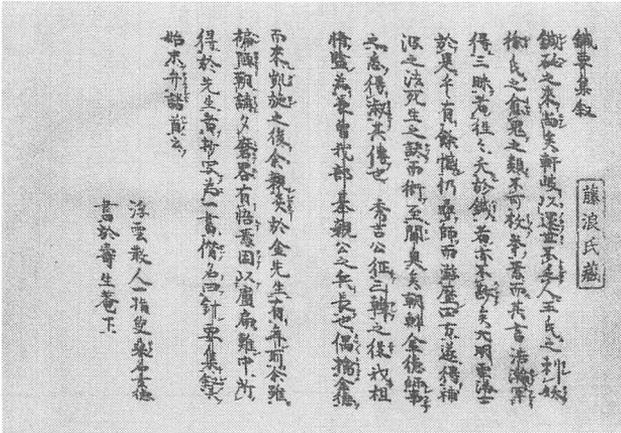


図2 『鍼要集』叙

明人の雲海は師を尋ねて四方を遊歴し、遂に補瀉の法、死生の訣を得、のち朝鮮の金徳がこれに師事し、悉くその伝を淑することを得ることができたとされる。桑名玄徳の祖は金徳を捕虜にして凱旋したが、玄徳はこれに師事して術を得て一書にしたのが、『鍼要集』とする。

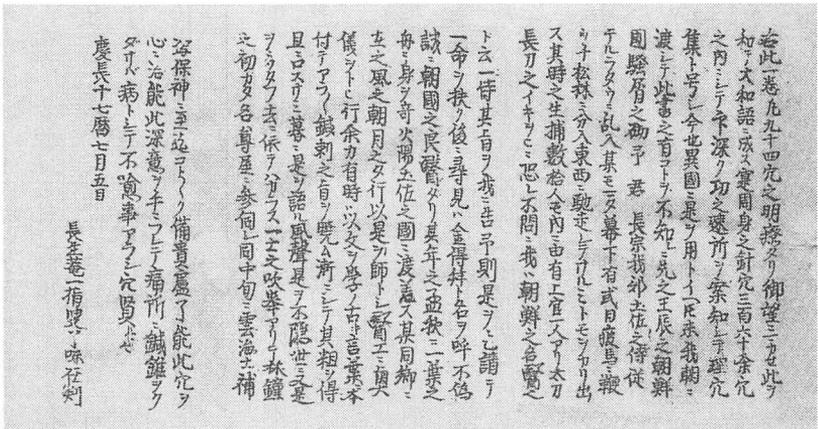


図3 『理穴集』(京都大学蔵)

金得拜が朝鮮国の良医で、土佐に渡ってきたことが示され、捕獲された時のことが、書かれている。

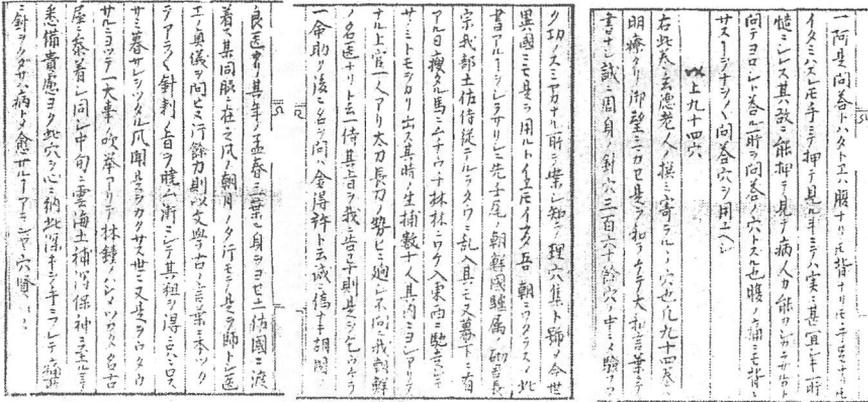


図4 『岩瀨本』

「玄徳老人ノ撰ニ寄セラルル停ノ穴」と書かれており、『岩瀨本』の書写したものは桑名玄徳の弟子であった可能性がある。『理穴集』（京都大学蔵）では金得拜、朝国だったものが、『岩瀨本』では金得許、胡国となっていた。

のおり、長宗我部元親の兵長であった桑名玄徳の祖は金徳を捕虜にして凱旋したが、玄徳はこれに師事して術を得て一書にしたのが、『鍼要集』とする。『両東唱和後録』には、村上溪南が朝鮮通信使団一行の医官、奇斗文と対談し、村上溪南の祖が金得邦より鍼術を伝授されたことが述べられている。『理穴集』（図3）では、金得拜と書かれている写本（京都大学蔵）と金得許と書かれている岩瀨本（図4）、金徳許徳原と書かれた本（エーザイくすり博物館蔵）が存在した。『土佐物語』によると、金徳は文禄の役で捕虜となり文禄二年に土佐に来たとされる。『隱峯全書』には「又於望地浦尖山之戰。大立、与宋大立、金徳邦。大有捕獲。」「湖南節義録」には「忠武李公舜臣同殉參佐諸公興陽（三十三人）金徳邦」の記載を認めた。『詒謀記事』には「金徳ハ新居に居たるといふ」とあり、高岡郡新居村に住み医師を続けたが、『土佐崎人伝』には、「初め一年の間、治療を施せども験なく、人命をあやまる事多し。異国にも庸医ありとて、人皆譏笑す」。「経東且暫且患ひて久しく籠居」「朝鮮日東土等しからず、人性また異なることをさとり」「是より薬劑あやまらず、活死起源の功著し」の記載があり、来日後一年間は、治療効果を見せず、薬害を起こしている。それを恥じて、朝鮮の風土とは違う日本向

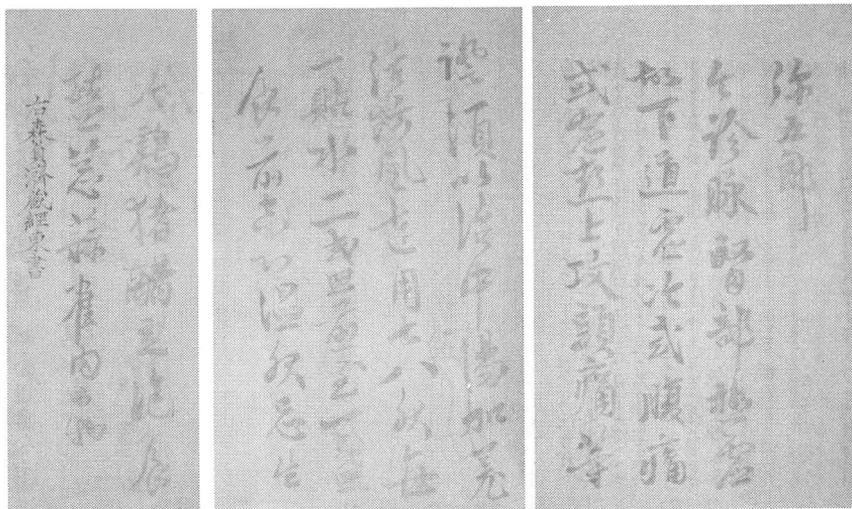


図5 森貞濟藏經東書

『土佐崎人傳』に記載されている經東肉筆の書の影写。『土佐崎人傳』の原典は第二次世界大戦で消失したが、高知市民図書館若尾文庫に影写が残っている。

きの薬方に改め、以来治療効果を上げて信望を高めたとあった。『土佐崎人傳』には、「腎虚、獨宿補精爲可、今診脈候、左右手六部脈、中心肺浮數、必是、心虚血所、而虚點風點上攻、做生頭痛耳痛之證、須以補之氣助血、使肥膚紅潤、使心部鎮定、使頭風驅逐、則其根永差矣」という医案の後に、森貞濟藏經東書といわれる經東肉筆医案の影写(図5)「弥五郎、今診脈、腎部極虚、故下道虚冷、或腹痛或虚熱上攻、頭痛等證。須以治中湯加羌活防風、連用七八服。每一貼水二盞煎至一盞、食前空心温服。忌生冷鷄猪醋豆泡食副卵蒜雀肉等物」という医案が載録されていた。慶長初期に鎌田勘之丞(家時)により書かれたと考えられている『治代普頭記』³⁾には、当時の上方における主要な医学の流派が記載されているが、この中に、「先年元親代高麗より渡海さんと流」との記載があった。『土佐物語』(資料1)には、「伏見へも召し上げられ、経験の功を顕はしければ、京都にも外にまた医工無きが如くなりしかば、その頃の大医深く是を憤り、饗応を設け經東を請じ入れて、鳩毒を

進めたり。経東是を食して、その鳩毒なる事を知りて言ひけるは、「是程の毒をば忽ち解する事はいと易し、されども今死せずんば必ず刀刃の難遁るべからず。如かじ、今死せんには」とて、懐中より四寸四方ばかりの一つの書籍を取り出だし、「これ万民を救うの書なりといへども、日本人に伝ふるは遺恨なり」とて、火の中へ投げ入れ焼き捨て、その身も程なく死したりけり。」と毒殺にて死亡した記載を認めた。

考察

文禄・慶長の役に秀吉軍が略奪した書籍は、船数艘・笥数十・車数台・数千巻ともいう。当理由で十六世紀までのあらゆる書籍が、韓半島からほとんど失せたらしい。さらに活字ばかりか印刷工まで連れて来たので、日本では医書も活字出版が急激に流行した。それ以前に日本で印刷出版された医書（整版）は、わずか数書しかない。⁽⁴⁾⁽⁵⁾ 文禄・慶長の役の後、僧侶惟政は宗義智の仲介で、伏見城にて徳川家康に拜謁している。家康は文禄・慶長の役に参戦していないことを挙げ、関係修繕のため朝鮮人の送還を約束した。慶長十年四月、惟政帰国。五月、宗義智は朝鮮人の送還を行っている。朝鮮は家康が関係修繕を求める国書を送ること、九代国王成宗、十一代国王中宗の墓を荒らした犯人を送ることを条件に、日本と国交を結ぶこととした。慶長十二年正月、呂祐吉（ヨウキル）ら刷還使（朝鮮人の送還を役目とする者）が日本へ派遣されている。⁽¹⁾ こうして朝鮮に帰ったものだけでなく、日本において死亡したものの、帰国せず日本に定住したもの等も多いとされる。李朝からの渡来医人は、伝存史料のみで十名を越すとされるが、金徳はこうした医師のなかの一人であった。高知（土佐）には多くの朝鮮人が在住し、影響を与えたとされる。鯉のタタキは江戸時代（中期以降）鯉の火焼（ほやき）鱸と呼ばれた料理である。皮だけ火あてにし、冷たい水にとって冷まし、水分をきってからつくり、塩と酢をかけてふりかけてもみ、酢が白く濁ったら、その酢をきって器に盛る。葉味はユズの新芽の刻んだもの。ニンニクを添えるのは土佐特有の食慣だが、これはこの地に

慶長以後住まいした朝鮮半島の人達の食習慣の影響によるものとされる。その他にも、纏(ムツ)と朝鮮ではいわゆる「かし豆腐」、縄で縛って肩に担げるとも言う固い豆腐で朝鮮式の豆腐である唐人豆腐(いなか豆腐)、朝鮮の大の皮を細かく切って揚げた食べ物と形が似ていることから名付けられたケンピ(乾皮・犬皮)など多くの影響を土佐に及ぼしている。土佐の大名である長宗我部家の長宗我部という姓は、秦(波多)の姓より改名したもので、諸説あるが、元親より二十一代前の秦能駿が土佐に移って長岡郡宗我部郷を領地したことから長宗我部の名はそれになむと云われる。⁽⁸⁾⁽⁹⁾『土佐軍記』には、百濟から来た長という人日本に留て、秦という姓を得た。その後、信州から勢州桑名を経て、紀州から土佐に来たとされる。¹⁰⁾大和岩雄によると、秦の民は朝鮮半島の南端にあった加羅(伽耶)、特に金海地域から移住してきたという。秦氏たちは、自らを秦の始皇帝の末裔だと称していたとされるが、朝鮮半島由来の渡来系の子孫が逆に文祿・慶長の役にて朝鮮半島を攻めたという点は、興味深い。桑名氏は伊勢平氏の後裔で、応永(一三九四～一四二八)頃に桑名より土佐に來国と言う。長宗我部氏の土佐下向時に伊勢桑名より従えたと言われる譜代の家柄である。長宗我部氏の土佐下向には諸説あるが、『群書類従』の『長宗我部譜』には桑名より來国という。¹²⁾『鍼要集』に記載されている金徳を捕らえた長宗我部元親の兵長であった桑名玄徳の祖(桑名将監)は、この桑名一族出身であった。そして、桑名氏は、長宗我部氏の衰退後、他家に仕えたり、全国に散っていた。『鍼要集』には金徳が明人の雲海に学んだことが書かれている。金徳が雲海に学んだことより、金徳の医術の流派は雲海士流ともいわれる。²⁾中宗(一五〇六～一五四四)の中期に於いて明の世宗に医官の派遣を請い、許されて明医が來朝し医学生に教習を行ったと云われる。また、このときから明宗(一五四五～一五六七)・宣祖(一五六八～一六〇八)の中期に亘って夥しく中国医書が翻刻された。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾金徳は、こうした時流もあり、明人に学ぶことが可能であったと考えられる。長野仁は『鍼法古新的伝集』を注釈した『的伝集之抄』に「万曆丁亥(十五年(一五八七))」の年号がみえるので金徳は日本に連行される五年前まで雲海士に師事していた可能性があると類推して

いる。⁽¹⁵⁾『鍼法古新的伝集』一六一三（慶長十八年）における『寅勤書』の巻頭には雲海土主翁は明・南陽の人で『鍼灸日編集論』を著した人とされ、金徳拜とこの書の中では書かれている。また、将監が夢想によって長生庵と号したのは一六〇八（慶長十三年）で定住した広島では有名になったが、京都では未だ無名であったことが記されている。木邨元貞『鍼灸極秘伝』一七八〇（安永九年）に、金徳邦→長田徳本→田中知新→原恭庵→木邨太仲元貞の系譜を認めた。長田徳本の号は「知足」であり、田中知新の号の「知新」と一文字重なる。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾従来、円敬軒・三達と松沢浄室に田中知新は学んだとされるが、号の中に「知」という文字がどちらも含まれ、師弟関係の可能性があると考えられた。しかしながら、長田徳本が慶長年間学んだとすると、諸説あるものの一五一一（永正十年）生まれという説と取ると、徳本八十歳代の頃に学んだということとなり、師と弟子の関係では矛盾する。しかしながら、友人として交わり、互いに学んだと考えると理解可能である。朴好仁は、文禄の役では熊川の戦いで殿軍として勇戦し、長宗我部家の吉田市左衛門政重に晋州の城にて虜にされた。『土佐物語』では、慶州の大将とされている。⁽¹⁷⁾虜になった一族主従八十余名のうち三十余名と共に土佐浦戸に住んだ。このとき「湯薬師」と看板を掲示して医薬をおこなっていたという。朝鮮医療技術、医書、豆腐やコンニャクの製造法などの朝鮮文化を土佐に伝えたことされる。朴好仁の朝鮮語の音が、pak ho in から土佐では一般に「はくほう院殿」と呼ばれた事が知られている。同じように、金徳邦の朝鮮語の音は、kim teok pang であり、日本人にとって正確な発音が難しい。金徳邦は一般に「きんとん」と呼ばれ、経東と書いて「きんとん」「きんと」と言われ、金徳とも書かれたと考えられる。平尾道雄は『経東は「きんとん」と読んだらしく、それが誤って金徳となった』と論じている。⁽¹⁸⁾『理穴集』では、金得拜または、金徳許徳原または、金得許と書かれている。朝鮮語では、徳は teok、得は tuck であるが、日本語では、徳も得も同じ「とく」と発音することから、異字同訓として書かれたと考えられた。また、「邦」の字、「拜」の字、「許」の字は草書体で書かれると、類似しており、誤って書かれたか書写された可能性があると考えられた。長野仁は金徳拜、

金徳、金徳邦、金徳許は同一人物と断定しているが、三木栄は金徳と金徳邦と別の医師として考えていたよう⁽¹⁹⁾で、金徳は朝鮮の役に捕虜となり薩摩に来たと「日本博物学年表」より引用している。⁽²⁰⁾この薩摩に来た金徳が別人であった可能性は完全には否定できないものの、薩摩ではなく、土佐の誤りであると考えた方が、雲海士流といわれる一連の書物からは合理的であると考えられた。また、三木栄は「筆者かつて、金徳の遺方を見たことがある。」と記載している。⁽²⁰⁾今回の調査にて、経東直筆の医案の影写(図5)を認め⁽²¹⁾た。三木栄が見たという遺方は経東ではなく、金徳と書かれていたようで、さらに、金徳の医案が残っている可能性があることが示唆された。『両東唱和後録』には、村上溪南親子が朝鮮通信使団一行の医官、奇斗文と京都にて対談し、村上溪南の先祖が金得拜より鍼術を伝授されたことが述べられていた。村上溪南は自分が疑問とする点を奇斗文に対して質問している。⁽²²⁾三木栄は「徳邦の術を世々伝うと云う」(『両東唱和後録』)と記載し、我々が確認した茶図成實の『両東唱和後録』以外の写本では、徳邦と記載されていた可能性があると考えられた。⁽²⁰⁾ソウル大学奎章閣に保管されている『隱峯全書』には、「又於望地浦尖山之戰。大立、与宋大立、金徳邦。大有捕獲。」とあり、同じく奎章閣にある『湖南節義録』には、「忠武李公舜臣同殉参佐諸公興陽(三十三人)金徳邦」と書かれている。他国の記録と比較して、自国の記録での名前は間違われにくい。韓国側の記録に金徳邦と書かれていることから、金徳邦、金徳許、金徳許徳原、金得拜、金得許、金徳、経東とさまざまに書かれるものの本来の名前は、金徳邦である可能性が高いと考えられた。また、『隱峯全書』、『湖南節義録』に述べられている状況と『理穴集』での「其時之生捕數拾人モ内ニ由有上官一人アリ」との捕らわれた状況と人数は近似する。⁽²³⁾⁽²⁴⁾粉河寺は、和歌山県の北部を東から西に悠然と流れる紀ノ川の北岸にあり、和歌山市と高野山のほぼ中間に位置する。奈良時代末、七七〇(宝亀元年)大伴孔子古が現在の本堂の場所に草案を結び、千手観世音菩薩を安置したのに始まる。⁽²⁵⁾粉河寺は、まず大伴氏の氏寺として草創され、僧尼を檢行し、財務経営に当たる俗別当として、最初に益継が任じられたといわれる。⁽²⁶⁾以来、粉河寺は盛行をきわめていた。一五八三(天正十

八五（天正十三年）三月二十日羽柴秀吉の先發隊が出陣し、二十一日秀吉自身も出陣。二十三日には粉河寺より、約十キロメートル西にある新義真言宗本山根来寺を中心には火の海と化した。三月二十四日には粉河寺も炎上。これは、秀吉軍が来る前に、五人の寺衆が火を付けたからと伝えられている。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾宇野主水日記天正十三年三月条『石川本願寺日記』下には、「土橋平丞舟にて土佐へノク由申、湊衆も其躰也。船あまた乗沈人多死タル由申」と記されている。⁽²⁹⁾天正年間の兵火に遭つてのち、江戸初期に御池坊天英が入寺して復興、叡山横河末となり、現在は天台宗系粉河観音宗と称している。⁽³⁰⁾この紀州攻めの折り、粉川春與も土佐に来ることとなったと考えられる。粉川春與の子孫にあたる粉川玄成は、『土佐国蠹簡集木屑』に「経東書ト申伝」「経東所持、朝鮮器物、菓子盆」「経東人参切、

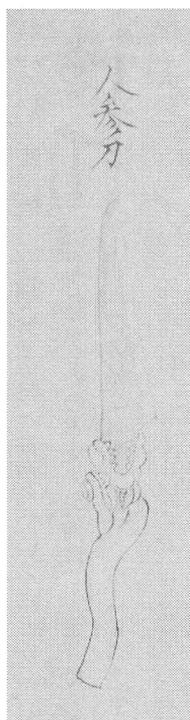


図6 『土佐崎人傳』に載る龍の飾りのある人參刀。『土佐国蠹簡集木屑』には「人參切図の寸法は全長一四・九糎刃幅最長部分一・九糎」と記されている。

一年）四月柴田勝家を賤ヶ岳の戦いに破り、信長の後継者として地位を固めた羽柴秀吉は、大阪を拠点に定めた。秀吉にとって、大阪を南から脅かす紀州衆の存在は捨て置かず、岸和田に中村一氏を置いてこれに備えた。この様な状況下の中で紀州衆は、秀吉と対立していた徳川家康、織田信雄や長宗我部元親と結んで秀吉と対峙していった。一五

刃柄トモニ唐赤銅」「春與書ト申伝」「長沢道壽書」を持つていと記載されている。菓子盆と人參刀の図が、「土佐崎人伝卷之四」²¹⁾に残されており、菓子盆と龍の飾りのある人參切(図6)は当時の朝鮮の品と考えられ、興味深い。「人參切図の寸法は全長一四・九糎刃幅最長部分一・九糎」と「土佐国蠶簡集木屑」には記載されている。³⁰⁾『粉河寺縁起』(国宝)は、粉河寺の本尊千手観音にまつわる説話を描いた絵巻であり、鎌倉初期(一二世紀後半)の作とされる。説話は二つあり、第一話は山中の獵師のところに童の行者があらわれ、千手観音を造つて姿を消したという粉河寺草創の話。第二話は病気に罹つた河内国讃良郡の長者の一人娘の話である。長者の娘が熟し柿のように腫れ、臭いことかぎりない病に罹つたところに、童の行者がやって来て、「七日ばかりお祈りしてみましよう」と言う。長者は喜んで祈祷を依頼する。童の行者は、娘の枕頭で千手陀羅尼を昼夜一心に誦誦した。すると、その効があらわれたのかしだいに膿もひき、痛みもとれ、七日目の朝には「爽々となりて」、起きられるようになった。驚き喜んだ長者は、蔵を開いて、七珍万宝を童の行者の前に並べた。ところが童の行者は謝礼の宝物を辞退し、娘の差し出した提鞞と紅の袴だけを受けとり、住まいは紀州の粉河とだけ告げて立ち去つた。翌年の春、長者一家はそのあとをたずねると、山中に一軒の庵があり、そのなかに提鞞と紅の袴を持った千手観音が燦然と輝いていた。そこではじめて、あの童の行者はこの観音の化身であつたと知り、一同剃髪して観音に仕えたという話である。立川昭二はこの河内国の長者の重病を救つた童の行者も遍歴した僧医のひとりであり、七日間一心不乱に千手陀羅尼を誦しただけでなく、実際に特効のある薬を与えたり、鍼治療などをほどこしたのであろうと推測している。³¹⁾大阪市立図書館石崎文庫所蔵の『済民記』における跋文には、「右三卷紀州粉河原寺、摘王永輔惠濟方、虞天民医学正伝等萃要、以卑俚字辭記之、意欲導初蒙侶而已。天正元歲次癸酉中」と書かれており、『済民記』の跋文の最後には「天正元歲次癸酉中元旦 玄朔」と書かれている。一五七三(天正元年)に王永輔の『惠濟方』、虞天民の『医学正伝』を中心に編纂された本で、惠濟方の濟と、虞天民の民を採って『済民記』と名付けられていたらしい。³²⁾紀州粉河原寺

は、粉河寺のことと考えられ、一五八五（天正十三年）豊臣秀吉の紀州攻め以前、粉河寺は、曲直瀬家を初めとする後世派医師が集うサロンの一つであった可能性があると考えられた。こうしたこともあり、粉河氏が医師の家系となったことも矛盾しないと考えられた。『土佐物語』（資料1）や、『土佐崎人伝』に記載されているように「初め一年の間、治療を施せども験なく、人命をあやまる事多し。異国にも庸医ありとて、人皆譏笑す。」「経東且暫且患ひて久しく籠居」「朝鮮日東土等しからず、人性また異なることをさとり」「是より薬剤あやまらず、活死起源の功著し」との記載は、大陸の医学をそのまま日本で行ったことで医療被害を起こした事例と考えられる。⁽¹⁷⁾⁽²¹⁾ 大陸の東洋医学が流入している現代に、警鐘を鳴らす事例と考えられた。

「経東を請じ入れて、鳩毒を進めたり。経東是を食して、その鳩毒なる事を知り」と『土佐物語』には書かれている。⁽¹⁷⁾ 鳩鳥の存在と毒性も前七世紀から知られていた。⁽²³⁾ 酖という文字が、前六六二年にあたる『春秋左氏伝』莊公三十二年の話にてでくる。⁽³⁵⁾ 酖は鳩酒と説明される。⁽³⁵⁾ これまで、鳩鳥の存在は現実として存在するかに疑いもたれていた。しかし、一八三〇年ピットフーイという二音節に近い鳴き声から、Pitohui（モリモズ）属と命名された鳴き鳥が報告され、一九九〇年、シカゴ大学のダンバッチャー氏らが偶然その羽に中毒し、毒性に気付いたことより報告がなされた。⁽³⁶⁾ この記事により、毒性を持つ鳥類が報告され、鳩鳥がかつて実在したことを真柳誠は確信している。⁽³⁷⁾ 後醍醐天皇の皇太子とその弟宮および足利直義（太平記）、山田長政（山田長政資料集）、伊達騒動での毒味役・塩沢丹次郎（伊達頼秘録）、などの毒死は鳩毒との関連が記され、彼らの死亡情況はヒ素化合物の中毒症状に類似する。毒が何であれ、毒・毒酒・毒殺は鳩毒・鳩酒（酖）・鳩殺と喩えられる。⁽³⁸⁾ 高知においても、次のような記載が見られる。一五六九（永禄十二年）、長宗我部軍が安芸城を包囲して、包囲側は安芸川の対岸から火矢を放ち、城を焼いた。内にいた料理番はその猛攻に恐れをなし、この井戸に毒を投じて長宗我部方へ走った。この毒によって城兵が多大な損害をこうむり、ついに城は陥落したという。『土佐物語』では横山民部というものが鳩毒を投げ込む

系譜

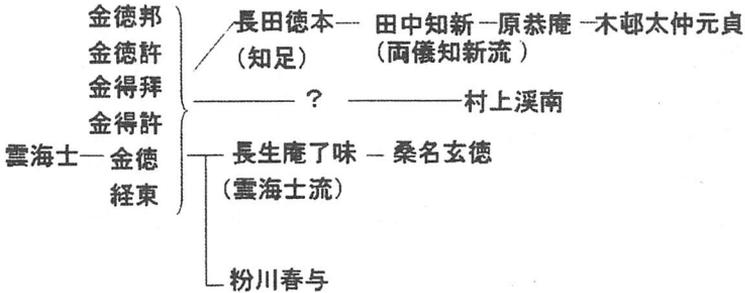


図 7 金徳邦の医療は彼の死後も継承されていったことが判る。

記事がみえる。⁽¹⁷⁾『神農本草経』には、「犀角は：鉤吻・鳩羽・蛇の毒を殺（け）し：」（鉤吻つまり野葛や毒蛇の中毒とともに、鳩羽による中毒を犀角が解毒する。）との記載が見られる。⁽³⁹⁾鳩毒の成分は今なお、不明である。しかしながら、宮崎はこの毒物が砒素系の物質としても、犀角によって解毒の可能性があったとする。⁽³⁸⁾犀角の成分には thiolactic acid や cystine などが含まれており、⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾ thiolactic acid は SH 酵素賦活作用のある SH 基をもっている。したがって SH 酵素を阻害する砒素化合物の中毒を解毒する可能性があるとす⁽³⁸⁾る。『詒謀記事』にある「京地の医工首を締め、終に嫉みを生じ、饗⁽³⁸⁾応に托して招寄せ、食に交へて、鳩毒を与ふ。経東喫して是を知り、此毒癒すること易し。」という記載は、⁽⁴²⁾金徳がこうした解毒法を知っていたからとも考えられた。

総括

安土桃山期から江戸期にかけて、大陸からの医療が日本に伝来した。大陸の医療をそのまま日本で行ったことで医療被害を起こした事例を認めた。大陸の東洋医学が流入している現代に、警鐘を鳴らす事例と考えられた。金徳邦の医療は、金徳邦の死後、長生庵了味・桑名玄徳、粉川家（粉川春與）、村上家（村上溪南）に伝承さ

れたことが明らかになった。（図7）

謝 辞

調査にあたり、韓国側から協力といただいた孟華燮漢醫院 孟原模先生、INURIOMH 柳恩卿先生に際し感謝を申し上げます。『隱峯全書』『湖南節義錄』に金徳邦の記載があることをご示唆していただきました。韓国韓醫學研究 院 安相佑学術情報部長に対し感謝致します。また、さまざまな点でご指導いただきました日本TCM研究所・安井医院 安井廣迪先生、菊池養生園診療所 吉富誠先生には、心より篤く御礼申し上げます。慶熙大学医史学 金南一教授には、金徳邦の生年月日に関する疑問を解決していただき、感謝申し上げます。

表 1

- 〔鍼法藏心卷〕（自筆稿本武田科学振興財団杏雨書屋 杏五五八四）
- 〔古今集鍼法〕（写本武田科学振興財団杏雨書屋 乾三二六八五）
- 〔雲海士流之書〕（写本京都大学富士川文庫 ウ・一一二）
- 〔八婦〕〔心鏡〕〔新撰〕理穴集
- 〔鍼要集〕（写本武田科学振興財団杏雨書屋 乾 三六五二）
- 〔新撰広狹神俱集〕（写本エーザイクすり博物館 三六六八一）
- 〔鍼法古新的伝集〕（写本エーザイクすり博物館 三六六八一）
- 〔今昔双撰之記 新撰三所之針穴〕
- 〔特效凡例〕〔他過治療凡例〕
- 〔雲海士流鍼之抄〕（写本エーザイクすり博物館 四六九〇〇）
- 〔理穴集〕（写本エーザイクすり博物館 三〇九二九）

『兩東唱和後録』(写本 お茶の水図書館 成實堂文庫)

『土佐国人物志』(高知市民図書館)

『詒謀記事』(高知県立図書館)

『土佐崎人伝巻之四』(高知市民図書館若尾文庫)

『詒謀記事見聞録』(高知市民図書館)

『土佐国蠹簡集木屑』(高知市民図書館)

『隱峯全書』(ソウル大学奎章閣)

『湖南節義録』(ソウル大学奎章閣)

『治代普顕記』(高知県立図書館)

【文献】

(1) 朝鮮史研究会『朝鮮の歴史』一二八頁、三省堂、東京、一九七二(昭和四十七年)

(2) 臨床実践 鍼灸流儀書集成第六冊、オリエント出版社、大阪、一九九六(平成八年)

(3) 鎌田勤之丞(家時)『治代普顕記』高知県立図書館蔵、慶長初期

(4) 真柳誠「韓国伝統医学文献と日中韓の相互伝播」『温知会会報』三四号、二〇八一—二一五頁、一九九四(平成六年)

(5) 金奉鉉「秀吉の朝鮮侵略と義兵闘争」四〇—一四〇四頁、彩流社、東京、一九九五(平成七年)

(6) 姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』、明石出版、東京、二〇〇二(平成十四年)

(7) 奥村彪生「日本の香辛料その使い方と歴史」、芳賀登／石川寛子監『全集日本の食文化第五巻油脂・調味料・香辛料』、二二三—二三四頁、雄山閣、東京、一九九八(平成十年)

(8) 平尾道雄『図説 土佐の歴史』、講談社、東京、一九八一(昭和五十七年)

(9) 「土佐国史料集成 土佐國群書類従」巻三、「土佐國羣書類従」巻第三十三「秦家系圖」、一一五頁、高知県立図書館、高知市、二〇〇〇(平成十二年)

- (10) 「土佐国史料集成 土佐國群書類従」巻四、「土佐國羣書類従」巻第四十一「土佐軍記上」、一一八―一九頁、高知県立図書館、高知市、二〇〇〇（平成十二年）
- (11) 大和岩雄「秦氏の研究」、東京、大和書房、一九九三（平成五年）
- (12) 吉村春峰「土佐國羣書類従」巻第三十三「長宗我部譜」：土佐国史料集成 土佐國群書類従 巻三、五九頁、高知県立図書館、高知市、二〇〇〇（平成十二年）
- (13) 三木栄「増補朝鮮醫學史及疾病史」、一七一頁、思文閣出版、京都、一九九一（平成三年）
- (14) 三木栄「増補朝鮮醫學史及疾病史」、一八〇―一八三頁、思文閣出版、京都、一九九一（平成三年）
- (15) 長野仁、篠原昭二、北出利勝「『知新流銅人形』（経穴人形）」発見！——田中知新とその周辺のことども——」、「医道の日本」、五八巻六月号、一一〇―一二六頁、一九九九（平成十一年）
- (16) 長野仁、篠原昭二、北出利勝「発見！伝説の名鍼医・田中知新の銅人形」、「季刊東洋医学」、五巻、八二―八五頁、一九九九（平成十一年）
- (17) 吉田考世「土佐物語」、一七〇八（宝永五年）、明石書店、東京、一九九七（平成九年）
- (18) 平尾道雄「土佐医学史考」、高知市民図書館、高知、一九七七（昭和五十二年）
- (19) 内藤記念くすり博物館平成十四年度企画展図録「鍼のひびき灸のぬくもり——癒しの歴史——」五〇―五一、二〇〇二（平成十四年）
- (20) 三木栄「増補朝鮮醫學史及疾病史」、一九一頁、思文閣出版、京都、一九九一（平成三年）
- (21) 岡本信古「土佐崎人伝」（巻四）天保甲辰夏六月 若尾瀾水、一九二八（昭和三年写本）、高知市民図書館蔵
- (22) 村上溪南「両東唱和後録」、一七二二（正徳二年）、お茶の水図書館茶図成賞蔵
- (23) 安邦俊「隱峯全書」（奎五三四九）、ソウル大学奎章閣蔵、一八六四（高宗元年）
- (24) 高廷憲「湖南節義録」（古四六五三―一八）ソウル大学奎章閣蔵、一七九九（正祖二十三年）
- (25) 逸木盛修「日本絵巻大成 月報五」三頁、中央公論社、東京、一九七七（昭和五十二年）
- (26) 西口順子「紀伊粉河寺とその縁起——寺院縁起成立に関する一試論」「史窓」一一頁、一九六二（昭和三十七年）

- (27) 粉河町史専門委員会『粉河町史第一巻』四一—一四一頁、粉河町、紀の川市、二〇〇三(平成十五年)
- (28) 粉河町史専門委員会『粉河町史第二巻』二六八頁、粉河町、紀の川市、一九八六(昭和六十一年)
- (29) 河原由雄『「粉河寺縁起」の成立とその解釈をめぐる諸問題』八六—一九頁、「日本絵巻大成五粉河寺縁起」、中央公論社、東京、一九七七(昭和五十二年)
- (30) 柳瀬貞重編「土佐国靈簡集木屑」高知県立図書館蔵(寛政初年ころ)
- (31) 立川昭二『生と死の美術館』二〇二—二〇七頁、岩波書店、東京、二〇〇三(平成十五年)
- (32) 遠藤次郎、中村輝子『曲直瀬玄朔の著作の諸問題—「山居四要抜粹」「済民記」は玄朔の著作か—』『日本醫史學雑誌』、五〇巻四号、五四七—五六八頁、二〇〇四(平成十六年)
- (33) 真柳誠「やみの医術—鳩鳥—実在から伝説へ—」神奈川医学会雑誌』二二巻四号、二〇一—二〇三頁、一九九五(平成七年)
- (34) 竹内照夫『春秋左氏伝・上』〔全釈漢文大系〕第四巻、一六六頁、集英社、東京、一九七四(昭和四十九年)
- (35) 真柳誠「鳩鳥—実在から伝説へ」、山田慶兒編『物のイメーজ—本草と博物学への招待』、朝日新聞社、東京、一五一—一八五頁、一九九四(平成六年)
- (36) J.P. Dumbacher et al. "Homobatrachotoxin in the genus *Pitohui*: Chemical defense in birds?". *Science* 258:799-801(1992)
- (37) 真柳誠「鳩鳥—実在から伝説へ」、山田慶兒編『物のイメージ—本草と博物学への招待』一五一—一八五頁、朝日新聞社、東京、一九九四(平成六年)
- (38) 宮崎正夫「鳩毒について」『薬史学雑誌』、一八巻二号、一〇一—一〇六頁、一九八三(昭和五十八年)
- (39) 『神農本草経』(森立之輯、松本一男編)影印部、七二—七三頁、昭文堂、東京、一九八四(昭和五十九年)
- (40) 赤松金芳『和漢薬』、八〇二頁、医歯薬出版、東京、一九七〇(昭和四十五年)
- (41) 難波恒雄『原色和漢薬図鑑』(下)、二八七頁、保育社、大阪、一九八〇(昭和五十五年)
- (42) 入江正雄『詒謀記事』、十、三五—三六葉、一七七三(安永二年)、高知県立図書館蔵

資料1 土佐物語

経東（きんとん）が事爰に経東とて、その頃朝鮮に隠れなき名医も、捕らわれて土佐国へぞ渡りける。嘗て朝鮮に在りし時は、「痲を癒やし、痲を起こし、人を活かすこと若干にして、誠の国の宝なり」と諸人挙つて悦びけり。経東当国へ来たり一年程は、病を治すけれども少しの効なく、人を殺すこと甚だ多し、国人共、「異国にもかかる盲医も有りけるよ」と、上下男女笑ひければ、経東大きに恥ぢ且つ患へて、暫く籠居して明け暮れ是を案じけるが、一時、朝鮮・日本土地同じからず、人も又異なる事を悟りて、その後は一度も薬劑を誤る事なく、終にその名を高く成りけるとぞ聞こえし。伏見へも召し上げられ、経東の功を顕はしければ、京都にも外にまた医工無きが如くなりしかば、その頃の大医深く是を憤り、誓心（ちかこころ）を設け経東を請じ入れて、鳩毒を進めたり。経東是を食して、その鳩毒なる事を知りて言ひけるは、「是程の毒をば忽ち解する事はいと易し、されども今死せずんば必ず刀刃の難遁るべからず。如かじ、今死せんには」とて、懐中より四寸四方ばかりの一つの書籍を取り出だし、「これ万民を救うの書なりといへども、日本人に伝ふるは遺恨なり」とて、火の中へ投げ入れ焼き捨て、その身も程なく死したりけり。華陀が獄中に一卷の書を焼きたりしを思ひ合はせて浅ましき。扱も彼の経東が医功の妙を伝へ聞くこと不思議なれ。中にも、土佐国に一人の婦人懐妊す。経東その脈を診して申しけるは、「この子は男子なり、生まれて三歳の時必ず癩疾を病むべし。今よりして薬を服せばその患ひを免るべし。然らずんば永く治すべからず」と申しければ、その夫是を聞きて大きに腹を立て、「昔の扁鵲・淳于意など言ふ神仙さへ、左様の例しは無し。ましてこの頃の医師如きに、かかる妙のあるべき様なし」とぞ怒りける。諸人笑い冴るこそ尤もなり。その後右の婦人平産す、果して男子なり。その年も暮れ明るる夏の頃、小児何となく色白く死灰の如く成りしかば、いかなる事やと怪しむ所に、三歳の春より、経東が言へる如く癩疾顕はれたり。父母大きに驚き嘆き、急ぎ経東を招き薬を求むれば、経東申しけるは、「癩風は天刑の病、隱陽菌殺の氣の成す処なり。容易に治すべからず。然りと云へども胎中いまだ病まざる先に於ては猶治すべし。今生まれ下して病既に成る。薬力の及ぶ処に非ず」と言い捨てて去りぬ。その後この子幾程なく死せり。又或る人の娘五六歳の時、左の足の踵痒き事言ふばかりなし。爪を立てて搔きける所に、皮膚より小さき白き石出でたり。父母驚き経東に見せければ、「この石今一つ必ず出づべし」と言う。案の如く日を経て又一つ出でたり。父母この由を経東に申しければ、「この石、内に有りて肩を越したる時は不治の病となる。この石出でたる事長命の相なり。九十までは病有

るまじきぞ」と申しけるが、果して一生の内無病にして、九十余にて死したり。か様の不思議多し。経東常に言ひけるは、「当国によき人參有り」として、大きな丸合羽を着て山野に出で、草むらに座して合羽の内にて是を取り、葉をば人の見ぬ所へ捨てたりしとかや。あはれ親炙して是を学びば、いかに医工を和朝に伝え残すべきものを。邪なる妬み故無法の死を与へて、天下の宝を失ひけるこそうたてけれ。

The Association between the Medical Arts of Japan, Korea, and Ming Dynasty China during Toyotomi Hideyoshi's War

Takanori MATSUOKA, Koichi YAMASHITA, Toru MURASAKI

Traditional Korean medicine's pronounced impact on Japan came about as a result of Toyotomi Hideyoshi's war on Korea in the late 16th century. The influences of Korean medicine on Japan were caused by the introduction not only of a large number of medical books printed in the Yi dynasty and the techniques of publication but also those of the people of talent. We researched one doctor who came to Japan during the war of the Bunroku periods. The name of the doctor was Kintokuho. He learned medicine from a Chinese, Unkai(YunHai). He caused the iatrogenic diseases in the first year and so he changed his medical prescription to fit Japanese. After this, his treatment produced a curative effect. After his death, his art of medicine was passed on to his pupils.